デジタル
雪まつり新聞
The Digital SNOW FESTIVAL Press

この紙面はさっぽろ雪まつりを連報するために特別に作られた編集チームがMacintoshのDTPで製作し、毎日に掲載しております。同時にインターネット上にPDF形式で全く同じものを掲示します。

発　行
デジタル雪まつり新聞
編　集　局
札幌市立札幌星園高等学校
昼間部パソコン部内新聞局
道都大学短期大学部ＯＡ研究部
ACE Hokkaido
教育とコンピュータ利用研究会北海道支部

ラストスパート
審査前日の追い込み

二月六日、吹雪の中着々と、国際コンクールの作品は作られていった。雪像を作っている制作者たちは寒さを感じながらも頑張っている様子だ。仕上げにとりかかっているチームもあれば、あまり進んでいないチームもある様子で、どのチームが優勝するのか非常に楽しみなところだろう。また、参加者の一人にインタビューしたところ、「雪の降らない国なのでこれだけたくさんの雪は驚きです。それに顔に雪が当たるのが苦痛にも感じます」と話していた。ほかに、前回参加した全てのチームは、雪が多く雪像に積もることによって像がガタガタになってしまうことを一番心配しているようである。

雪像造りの光と影

各二十カ国から来た人たちは、皆、非常に楽しんで作っているようだ。彼らはとても友好的で、我々記者の質問にも一生懸命応じてくれた。見物客と片言の日本語で会話する姿が見られ市民レベルでの小さな国際交流が行われていた。作品の進行状況は、全チームが順調で、特に大きなアクシデントはなかったようだが、唯一、オーストラリアが、日光による被害があったようだ。

全体的に、初日は型取りなどにより時間が取られ、何を作成しているのかわからない状況だったが、二日目は、だいたい形が整ってきたので、一般の人たちにも制作過程が良く分かる状態になってきた。寒い中、参加者たちはがんばっているので、ぜひとも最後までベストを尽くしてもらいたいものである。

コア（ハワイの戦士）

自国の文化を伝えたい

ハワイチームは、コア（族長クラスの戦士）の雪像を作り上げている。その作品は前方から見た形が非常に特徴的だった。特に兜の飾りがすばらしい出来である。団員の話によると、雪像には骨組みを入れてはいけないことになっているので、兜のバランスが難しく時間がかかったようだ。

雪像づくりを完遂することが目標で、作品によりハワイの文化を観客に伝えることが、雪像を作る目的だという。

また、ハワイチームの団員は全員ホテルの関係者とシェフであることから、札幌の食べ物に興味があり、「二条市場に行って刺身を食べたい」と楽しそうに話した。

キング・サーモン（フィンランド）

急ピッチ作業続く

六日の各チームの仕事は、制作開始三日目ということもあり追い込み状態のようだ。フィンランドを皮切りに、各国とも雪像の表面にシャーベット状にした雪をコーティングしていくことで、大理石のような美しさを醸し出している様子。

一方、いまだそのような段階に至ってはいないチームは、急ピッチの作業が続いている。

降りしきる雪が、今回は彼らの身にとって最大の敵となるが、雪像にとってはベストなのではないだろうか。

記者席

もう一つのイルミネーション

昼間の明るい雪像と同じように、夜のライトアップされた雪まつりもまた見どころだ。

中でも氷像はライトを当てることにより、まさに幻想的ともいえる美しさで、札幌のもう一つの風物詩であるホワイトイルミネーションにもひけをとらないほどロマンチックなものになる。

寒さに負けず夜の大通公園にも足を運んでみるのもいいのでは。

白き芸術

今回、国際雪像コンクールを見て感じたことは、各国が製作した雪像のレベルが高いということである。どこの国も、表現したいテーマを忠実に再現していたように見える。やはり、白くてきれいな雪を使ったメッセージが故に成せることであろう。白銀の芸術を無に帰すのが惜しいくらいである。